

<都立片倉高校野球部の入部を希望・検討してくれている中学生、保護者の方々へ>

2024. 6 片倉高校野球部監督 宮本秀樹

中学3年の野球少年にとってどこの学校に進学し、高校野球やろうかというのは、充実した高校生活を送るために、またその後の人生にも関わる大切な問題でしょう。君たちの中には私立高校からすでに誘いを受けた人もいられるかもしれません。君たちが決断するにあたっての判断材料として、都立片倉高校の野球部についてお知らせしたいと思います。



<学校>

横浜線八王子みなみ野駅から徒歩10分のところに位置する、いわゆる中堅都立高校です。最近建てかえた綺麗な校舎というわけではありませんが、学校の価値は校舎で決まるのではなく、そこにいる人で決まると思います。片倉は全国大会金賞を目指す全国的に有名な吹奏楽部や関東大会やインターハイ出場者を毎年輩出する陸上部、近年急速に力をつけて、昨年東京都ベスト8にまで進出したサッカー部などの部活動の他、造形美術コースがあり、校内にはそれぞれの目標を持って進学してきたいろいろなタイプの生徒がいます。そういった生徒の触れ合いの中で他校にはない経験ができる学校です。

<野球部施設>

校門を入ってすぐの所にグラウンドがあります。専用グラウンドではなく、通常は他部との共用ではありますが、両翼90メートル以上でファールグラウンドもしっかりと取れ、試合をするには十分な広さがあります。また、都内のグラウンドには珍しくホームの上の天井ネットがありません(バックネットの後ろは片倉山です)。内野にはしっかり黒土が入り、秋春の公式戦(ブロック戦)の会場になっています(全都24ブロック、うち都立は4校)。グラウンドの外にバッティングゲージ2台、バッティングマシンは2台、LEDのライトも増やし、日が短くなってもグラウンドで練習できるなど、施設は充実しています。



＜部員数と特徴＞

24 年入学(現 1 年生) 17 名+女子マネージャー2 名
23 年入学(現 2 年生) 17 名
22 年入学(現 3 年生) 10 名+女子マネージャー1 名
21 年入学(23 卒業生) 17 名(1 名、他校よりの転入生)
20 年入学(22 年卒業) 23 名+女子マネージャー3 名

10 年前くらいは 1 学年 30 人を超えることもあり、20 代後半が続いていましたが、近年はこの状態です。

・退部した者

20 年入学(1 名)／21 年(1 名)／22 年(0 名)／23 年(2 名)／24 年(0 名)

＜シニア、ボーイズなど硬式チーム出身者＞

20 年入学(8 名)／21 年(8 名)／22 年(4 名)／23 年(3 名)／24 年(7 名)

年によって違うが、だいたい全部員中 3～4 割くらいか。その他兄弟が多いことも特徴、数年前には 3 学年で 10 名分の部員が弟だったこともある。他校からの転入生 15 年間で 4 名受け入れている(全員卒業)。

＜卒業生の進路＞

大学進学者が 7～8 割程度、他は専門学校、就職、大学に進学して野球を続けるものが増えていきます(15 年間)。

大学: 立正大学(2)、拓殖大学(3)、駿河台大学(10)敬愛大学(4)、杏林大学(1)、高千穂大学(2)、日本ウェルネス大学(1)

硬式企業チーム: 鹿島レインボーズ(1)、その他硬式クラブチーム

軟式企業チーム: 日本航空電子(7)

＜練習、練習試合＞

原則火曜日を練習休みとし、シーズン中(3～11 月)の土・日・祝日はほぼ練習試合が組まれています。(学校と遠征の割合は 6 対 4 くらい)。チームを 2 つに分け、B チーム戦も行います。

通常は入学後しばらくの間、新入生は上級生とは別に練習していましたが、今年は 3 年生の人数が少ないこともあり、一緒に練習することも多くなっています(上級生がいろいろ新入生へアドバイスしていますが、これが上級生にとってもポイントを確認する。良い機会になっているようです)。

月曜日は土日の試合での反省を踏まえ、うまくいかなかったプレ-を中心に練習します。

木曜日はグラウンドを全面使用できるので、フリーバッティングや試合形式の練習をします。練習

の中で(特に冬場)各自で考えて、自分の必要な練習をする時間をとっています。各自工夫し、仲間とディスカッションしながら練習、私もそのディスカッションに参加することもあります。この時間が選手の成長にとって大切な時間となっています。トレーニングは森下コーチのトレーニングメニューに従って行います(筋力向上のほか、野球の動きにどう生かすか工夫したメニューになっています)。バッテリーはそれとは別に藤崎コーチによる月 2〜3 回の指導があり、肩甲骨、股関節の可動域を意識したトレーニングを実施。その時示されたメニューを各自、空き時間や帰宅してから行っています。

その他メンタルトレーニングや栄養指導、元プロ野球選手の方を招いた技術的指導など必要に応じて実施しています。練習試合は日々の練習の成果を試す場であり、チームとしての戦い方を探っていく場でもあります。また、相手の良いところを学ぶ場でもあります。こうしたことをするのにふさわしい学校との練習試合がシーズンを通して組まれています。朝練は、現在は原則的に行っていません(ご家庭の負担、疲労で授業中寝ないように、また放課後の練習時間がそれなりに取れているという状況などから)。しかし朝にウェイトトレーニングを行っている者もいます(指名した者のほか希望者も行っています)。

春秋のブロック予選は片倉のグラウンドで行います。この際は自分たちの試合でなくても、他校の試合がスムーズに行われるよう、球場運営などで働きます。また夏の大会では、多摩一本杉球場の補助役員としてグラウンド整備などの仕事があります(1・2 年生)。他校の選手たちと一緒に働くことで交流も生まれます。夏には 2 回の宿泊遠征(各 2 泊 3 日)を行っています。試合を中心としたもので、今年は茨城・福島遠征(水戸第一高校、磐城高校、日立第一高校)、長野遠征(松商学園、小諸商業高校、佐久長聖高校)です。それぞれ優れた雰囲気と技術を持つ学校で、毎年今までの自分たちにはないものを持ち帰って生かそうとしています。夜のミーティングは野球の勉強とチームの一体感を作る上で大切です。その他、正月の高尾山登山、5 月の吹奏楽部定期演奏会鑑賞(夏の大会の応援へのお礼も込めて)などの他、父母会主催の夏の大会への壮行会や、三送会などもあります。

＜監督、経歴と想い＞

早稲田大学在学中に、母校の東京学芸大附属高校の学生監督コーチをやる(2 年間)。卒業後、23 歳で都立野津田高校の教員(社会科、世界史)となり、野球部顧問になった(これ以降、65 歳の退職まで 42 年間 1 度も離れることなく野球部の指導に携わる)。2 年後、野球部監督となる。自らの未熟さゆえに、一時、グラウンド出てくる部員が 1 人になってしまうこともあった。その後、入部してきた選手たちと一緒にチーム作りをし、選手と同じ目線でしっかり向かい合うことの大切さを学んだ。

29 歳で東大和高校へ移動。東大和は 2 度目の準優勝直後であり、100 人を超える部員がおり、「全員野球」の「都立の星」として周囲からの視線を集めていた学校であった。その東大和の佐藤道輔先生は「甲子園の心を求めて」(この時代、この本は高校野球指導者のバイブルとも言われていた)の著者であり都立のカリスマ的指導者であった。異動 1 年目の夏の大会終了後、佐藤先生から監督を引き継ぐ(先生は部長になる)。その後、6 年間の悪戦苦闘。その中での先生からの教

え(ときには厳しく叱責されることもあった)は私にとってはかけがえのない財産となった。この時代がなければ、これほど長く高校野球の現場にいなかっただろう。

39 歳で府中工に異動と同時に野球部監督になる。当初は部員も揃わないようなチームであったが、東大和野球部 OB の大学生、飯田一史と一緒にチームの土台作りをした。この頃の一からのチーム作りは忘れられない経験である。次第にチームらしくなり東京都へ申請し、バックネットの位置を反対に移すなどをしてブロック会場校になる。そして、その年初めてブロック優勝(東京都ベスト 24)を果たす。その後 4 年間で 3 回のブロック優勝。うち 1 度は本大会で東海大菅生を破り、東京都ベスト 8 になる。またこの頃、高江洲拓哉が都立高校投手として初のドラフト指名を受け、中日ドラゴンズに入団する。部員数も 90 人近くになり、本当にいろいろ経験させてもらった。

50 歳で片倉へ移動。1 年後に監督になる。2014 年夏、転入生の金井の活躍もあり、西東京大会ベスト 4 になる(東海大菅生、東亜学園を破り、佼成学園に敗れる)。また 2018 年夏には西東京大会ベスト 8 になる(国学院久我山、都立日野高校を破り、日大三高を終盤まで、あと一步のところまで追い詰めるも代打逆転満塁ホームランで敗れる。この日大三高が甲子園ベスト 4 になる。この 2 回が、片倉が最も甲子園に近づいた時であった。甲子園まであと一步などという気はないが、このチーム以上に力があつたと思う代もあつたことも事実である。力を発揮させてあげることができず早い段階で敗退してしまった。そんな悔しい敗戦の数々を今でも思い出す。そして、それが今の自分を作っている。チーム作りはいつも自分なりの理想を求め、選手たちにそれを求めてきた。試行錯誤の連続。今から思えば勇み足、勘違いもあつた。

23 年 3 月、片倉 15 年で再任用教員としての定年(65 歳)を迎えた後も、部活動指導員として監督を続けている。かつて府中工と一緒に指導にあたった飯田一史が教員として支えてくれている。時間的な余裕とともに選手への指導も余裕を持つことができるようになった気がする。選手たちの成長が本当に嬉しい。チームは今、自分が考える理想のチームに近づいていると実感している。彼らが私の言葉を信じてやってくれていることに嬉しさと責任を感じる。だからこそ勝たせてやりたいと強く思うようになった。現在 66 歳、自分もチームもまだまだ成長できる気がする。

<チームスタッフ>

顧問として

飯田 一史	(社会科 2 年担任)	吉岡 幸隆	(数学科 2 年担任)
増島 健保	(数学科 1 年担任)	林 伸生	(社会科 2 年担任)

いずれも他校での豊富な高校野球の指導経験があります。

グラウンドでの指導のほか、選手の学校生活の上での相談にのったり、生活面の指導、また成績不良者の学習指導などきめ細かい指導を行っています。また、個々の選手への指導に関しては、顧問間での情報交換を密にし、選手が指導に混乱しないように努めています。

＜チームの雰囲気＞

いつも昨日の自分を超越べくワクワクした気持ちを持ってグランドに来ることを求めています。そのため、不機嫌な顔をして練習に来ることを厳禁にしています(周囲に気を遣わせます)。

片倉の練習の雰囲気を、かつて転入生が「とにかく楽しそうに野球をやっている。自分もこうした雰囲気の中で野球がしたい」と言ってくれました。それがちょっとでもおちゃらけたものにならないよう気をつけていますが、今はそうした気配は全くありません。先輩と後輩の関係でも、いわゆる体育会的な上下関係は一切ありません。

先日もきついトレーニングの後、グランド整備を指示したら上級生が率先してというか、当たり前に行っていました。下級生を甘やかしてダメになるという意見もあるかもしれませんが、彼らが上級生になったら今の上級生と同じことをしてくれるはずです。こうしてチームはつながっていきます。また、先日私が何か話そうとしたら、それに気がつかず、またはそれまでの仲間同士のおしゃべりをすぐ切り替えられずにいた1年生がいました。それを一人の3年生がそっと肩を叩いて注意してくれました。その彼は1年生のときにはいつも私に注意されている立場でした。上級生が下級生を育てる側面はあります。それは強圧的な指導ではないはずです。

だからといって片倉野球部は単なる仲良しグループではありません。西東京を勝ち上がるべく、本気で日々鍛錬しているチームです。だからときには私の大声がグランドに響き渡ることもあります。一瞬で雰囲気が変わります。外から見れば不適切な暴言ととられるかもしれません。でも選手たちは納得してくれています(そう信じています)。どうすれば選手が力を発揮できるかを追求してきた結果です。

あるスポーツライターの方が「リラックスし、ゆるそうでありながら、規律がある部分が片倉の伝統のようになっている」と表現してくれました。このバランスの妙が片倉野球部なのかもしれません。一度体験入部、練習見学などでこの雰囲気を味わいに来てください。グランドでは野球以外のことに変に気を使う事はなく、野球に集中できる環境になっており、誰でも居心地の良さを感じてもらえるはずです。



2024年 練習試合 対戦相手

3～6月

都内： 錦城学園 桐朋 安田学園 足立新田 小山台 府中工 紅葉川 新宿
葛飾野 成立学園 城東 駿台学園

神奈川： 市立金澤 白山 横浜清陵 弥栄 厚木北 立花学園 神奈川工 麻溝台
藤沢翔陵 県相模原

埼玉： 細田学園 豊岡 国際学院 坂戸

千葉： 西武台千葉

山梨： 日大明誠 身延 都留

群馬： 高崎 前橋商

兵庫： 武庫荘総合

7～8月

都内： 穎明館 文京 明大中野 芝 日大三

神奈川： 旭丘 鶴見大付属 横浜翠陵 鎌倉学園 県相模原 市立金澤

埼玉： 蕨 朝霞西 富士見 大宮南

千葉： 四街道

群馬： 高崎商

茨城： 水戸一 日立一

福島： 磐城

長野： 松商学園 小諸商業 佐久長聖

石川： 金沢大付属

9～11月

都内： 府中東 葛飾野 八王子北 富士森 国分寺 日大三

神奈川： 川崎北 川和 横浜清陵 湘南 市立橘 市ヶ尾

千葉： 成田

埼玉： 豊岡